広島大学附属三原校園研究紀要　第５集　2015　pp. 149-154

外国語活動

協同学習を採りいれた外国語活動の授業づくり

—新領域「希望（のぞみ）」との効果的な関連を図る—

デ　ミ　ー　ル　千　代

1　問題の所在と研究の目的

社会や経済のグローバル化は急速に進展し，国内外に関わらず，異なる文化の共存や持続可能な発展に向けた国際協力が求められるとともに，それらを担う人材の育成が教育にも求められている。

本学校園はかつて，21 世紀型の学力として社会のグローバル化・高度情報化・超少子化の進展に対応する国際的コミュニケーション能力の育成を目指す研究に取り組んでいた歴史があり，文部科学省による研究開発指定が終了した後も，幼小中を通して様々な形で外国の方との交流に取り組んできた。

また本年度は，文部科学省研究開発指定校として「社会的自立の基礎となる能力・態度及び価値観の体系的な育成のための，幼小中一貫の新領域による自己開発型教育の研究開発」の第３年次として新領域「希望（のぞみ）」の研究開発を行っており，幼稚園では希望（のぞみ）視点の保育，小中学校においては，全学年で総合的な学習の時間，道徳及び特別活動の一部を削減して取り組んでいる。さらに，この学習でもまた外国の方との交流を行っており，幼稚園・小学校では留学生との交流，修学旅行時の観光客へのインタビュー，中学校ではホームステイや平和公園を案内するピースプロジェクト等がある。

「国際コミュニケーション科」「総合的な学習の時間」「希望（のぞみ）」と，その都度教科や領域によって目標は異なってきたが，外国の方とともに，自己紹介・日本文化の紹介，また相手の国や文化について紹介を受けたり，一緒に給食を食べたりして普段外国の方と接する機会が少ない子どもたちがその機会をもち，外国語を体験的に使ったり，自分とは異なる国の人や文化に触れ，体験的にコミュニケーションを図るという活動については共通している。

小学校第５学年においては，筆者が赴任した平成 23 年度以降も，大学附属校という特性を生かして，広島大学に在籍する留学生を招いた交流学習を年２回行ってきた。一方で，平成 23 年度から小学校の教育課程で必修となった外国語活動の時間において，教科の目標を損なうことなくこれらの活動とどのように関連を図っていくかが課題となっている。

そこで本研究では，外国語活動の目標であるコミュニケーション能力の素地を養うということに焦点をあて，留学生との交流という体験的活動を通して，新領域「希望（のぞみ）」との関連を図りつつ，外国語活動の時間として，どのように子どもたちの学びを深めて行けるか，授業づくりのポイントについて論じるとともに，授業の事例を報告する。

2　授業づくりのポイント

平成 20 年８月に発行された学習指導要領解説外国語活動編 [1]によると，「コミュニケーション能力の素地」とは，①言語や文化に対する体験的な理解，②積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度，③外国語の音声や基本的な表現への慣れ親しみを指したものであり，外国語活動の目標として明示されている。

留学生との交流に向けて，これらの目標を損なうことなく，子どもたちが学びを深めていくこと

ができるよう意識したのが次の２点である。

(1) 必然性のある活動

子どもたちが外国の方あるいは友だちと積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を目指すためには，子どもたちが自ら「聞きたい」「伝えたい」「知りたい」という必然性がある場面設定を行う必要がある。人間は誰しも「知りたい」「未知のものへの興味」といった知的好奇心をもっており，好奇心旺盛な子どもたちにとっても然りである。そして，外国語活動においても外国語に対する好奇心あるいはコミュニケーションへの意欲を引き出すことは可能である。知的欲求をくすぐり，あるいは満たすことにより，子どもたちが言語・非言語問わずコミュニケーションを図る楽しさを感じながら，さらに知りたいあるいは伝えたいという思いをもち，学習を深めていくことにつながると考える。

本研究では，初めて出会う留学生やその国のことを「知りたい」「友だちに伝えたい」「学びたい」，そして留学生を「もてなしたい」という子どもたちの思いを大切にしながら学習計画をたてた。

(2) 協同学習

江利川(2012)は，協同学習とは「少人数集団で自分と仲間の学びを最大限に高め合い，全員の学力と人間関係力を育て合う教育の原理と方法」[2]だと述べている。また，杉江(2011)は，協同学習という学習指導の理論を，「子どもが主体的で自律的な学びの構え，確かで幅広い知的習得，仲間と共に課題解決に向かうことのできる対人技能，さらには他者を尊重する民主的な態度，といった「学力」を効果的に身につけていくための「基本的な考え方」[3]としている。この理念は，本学校園における自伸会信条「自ら伸びよ」のもと，長年大切にされてきた授業集団作りともつながっている。

コミュニケーションとは人と人とのかかわりである。そしてコミュニケーション能力の素地を養うための外国語活動では，友だちとのペアやグループでの活動が多く期待されている。母国語ではない外国語だからこそ，一人の力では達成することが難しい課題も多く存在し，友だちと一緒に何かをなしとげた喜びや友だちとの学びの楽しさを体感することで，学び続ける意欲を高めていくことができると考える。

本研究では，①自己紹介，②インタビュー＆他己紹介，③もてなすという３項目において子どもたちが主体的なコミュニケーション活動を行えるように協同学習を採り入れていく。

3　授業の実際

新領域「希望（のぞみ）」における「留学生さんとの交流」に関する年間学習計画は表１の通りである。広島大学の留学生との交流を通して，子どもたちが自分たちと異なる文化をもつ人々の存在に気づき，人々やその国に興味・関心をもったり，理解・尊重したりしようとすることを目指している。この学習により，見方や考え方がより豊かなものになり，多文化共生社会すなわちグローバル化した現代社会を生き抜いていこうとする力の育成につながると考えた。１年間の見通しをもった計画的な実施と継続的な交流により，子どもたちの意識を「留学生さん」から「○○国の○○さん」という留学生その人自身やその人の国に興味をもたせ，個別にお礼状や年賀状を送りあったり，また交流②では，留学生の生き方についても学ぶ場面を設定したりして，交流の深まりや子どもたちの将来性を広げることを目指した。

表１「留学生さんとの交流」年間学習計画

時期	題材
５月～６月	留学生さんとの交流① ～自己紹介をしよう～
12 月	年賀状を送ろう ～アルファベットを使って～
１月～２月	留学生さんとの交流② ～私たちのまちを紹介しよう～

なお本稿では，平成 26 年６月に実施された第１回目の交流について，単元の概要を表２に示し，

後に交流会当日を中心に取り組みや子どもの様子について述べていく。

表２　留学生さんとの交流①　単元の概要

希望（のぞみ）の目標	
留学生との交流に向けての活動や交流会を通して，自分と異なる国や言語の人々を理解し，思いやることが大切であることに気づくとともに，自分にできることを見つけたり，友だちのためにすすんで行動したりすることができるようにする。	
外国語活動の目標	
・留学生や友だちに自分のことや伝えたいと思うことを，積極的に伝えようとする。 ・留学生のことについて尋ねたり，自分のことを答えたりする表現に慣れ親しむ。 ・世界の様々な人々の存在や自分達と異なる文化があることに気づく。	
学習計画	
希望（のぞみ）の時間	外国語活動
	(事前)（4～5月） ●Hi,friends!Lesson1~5
●学習計画づくり（1） ・外国や外国の人とのつながりに気づく。 ・交流内容を決める。	●自己紹介をしよう（1） 既習の表現を使いながら，自分のことを伝える表現に慣れ親しむ。
●交流会に向けた準備（2） ・交流会の計画，役割分担 ・ゲストを迎える準備 ・留学生や出身国についての興味を深める。 ・おもてなしの練習	●インタビューをしよう（1） 相手のことをたずねる表現や答え方を練習し，積極的にコミュニケーションを図る練習をする。 ●おもてなしをしよう（1） 自分の係に応じて，必要な英語表現を調べたり，学んだりする。
●交流会（3） 1時間　準備（最終リハーサル・飾り等） 1時間　学級での交流（自己紹介・国の紹介） 1時間　学年交流（歌やリコーダーの発表） 時間外　おもてなし活動（送迎・案内・接待等）	
●交流のふり返り1（1） ・交流した留学生について全体共有する。 ・他国のことを学ぶ	●他己紹介をしよう（1） 自分の班に来た留学生になりきって，友だちに紹介する。
●交流のふりかえり2（1） ・外国の人との交流で大切なことについて考える。	
●交流のふり返り3（1） ・活動をふり返り，今後の交流計画を見直す。	●学習計画をたてよう 2，3回目の交流に向けて，学びたいことを出し合う。

(1) 自己紹介＆インタビューをしよう

自分のグループに来た留学生に対して自己紹介をするとともに，名前，出身地，年齢，好きなことなどを留学生にインタビューする活動である。さらに，子どもたちが交流した留学生を後日他のグループに紹介することで，より課題意識を高め学びが深まるようにした。

グループの人数については，友だちに頼りすぎるあるいは活動できずに見ているだけになりがちな子どもの存在を防ぎ，一人ひとりが主体的に活動できるよう３～４名の子どもに対し，１名の留学生となるようグルーピングを行った。また，学校外で英会話や英語を習っている子どもとそうでない子ども，さらに日頃の生活態度から積極的な子どもとそうでない子ども等が混ざるように配慮した。ちなみに，本年度交流の留学生は台湾，タイ，カンボジア，ベトナム，フィリピン，インド，コスタリカ出身で，フィリピンを除き公用語は英語ではない人々であるものの，留学生ということもあり英語力は十分である。

事前学習では，まず既習の内容を抜粋して最低限の例として提示した（表３）。グループごとの練習が進むにつれ，自然と子どもたちから自分のグループに来る留学生の出身国のあいさつをしたり，誕生日や飼っている動物なども伝えたりしたいという声が上がり，グループごとに話題が広がるとともに，互いに教え合ったり単語を調べたりする姿が見られるようになった。これこそが協同学習の成果であると考える。教師の例示を超えた「伝えたい」ことの存在，そして「調べたい」欲求を協同学習により子どもたちは主体的に追求し，本番に向けて練習していくことができていた。

そして交流会本番では，留学生が子どもたちの自己紹介した内容についてさらに質問することで，台本にはない真のコミュニケーションを生み出すこととなった。

(2) インタビューをしよう

インタビューでは，名前や出身国などの基本の質問の他に，事前にグループで話し合って決めた質問を１人１つ以上担当して留学生に尋ねた。英

表３　自己紹介活動における子どもたちの取り組み

教師による例示	練習により変更/追加された例	留学生(G)と子ども(P)との会話
(あいさつ) Hello. (名前) My name is …. (年齢) I am 10/11 years old. (兄弟)　I have …. (好きなこと/もの) I like …. (あいさつ)　Nice to meet you.	Good morning. Buenas dias. (スペイン語) I am (名前) . My birthday is …. I have a dog. This is my family. (写真を見せながら) Welcome to 5-2(学級).	G: A girl or a boy?　(ペットについて) P: Girl. G: What is her name? / What color? P: Momo. / Brown. G: So cute! (サッカー) G: What is your favorite team, SANFRECCE, Reds, Osaka? P: I love SANFRECCE Hiroshima! No. 1 team!

語学習が３ヶ月未満といった子どもたちにとって，使える英語は限られていたが，留学生と自分との共通点を探そうとしたり，それが見つかって一緒に喜んだり，あるいは好きな物事や家族の話題がさらに発展し，iPad を使って世界地図の中から出身国を調べたり，また留学生の持っているスマートフォンに入っている家族や出身国の写真などを見せてもらったりするなど，１名の留学生を通して，子どもたちの世界が無限に広がっていることが見てとれた。そして，ここでも台本にないやりとりが多数生まれるのであるが，子どもたちは何とか分かりたい，聞きたい，答えたいという気もちが強く，言語に頼らず，視覚資料や身ぶり手ぶりなど非言語コミュニケーションを駆使して伝わることの喜びを体感し，その大切さに気づくことができた。図１はインタビューをもとに子どもたちが作成したプレゼンテーション資料である。

図１　プレゼンテーション資料

(3) おもてなしをしよう

子どもたちは，これまでの学習経験から，実習生さんを迎える会やお別れ会など「～会」と名のつく活動の運営に関しては自分たちの力で進めていくことができていた。そのため，本単元では「交流会」だけでなく，ゲストの到着から出発までの半日を通して交流ととらえ，「希望（のぞみ）」の時間を使って，留学生に喜んでいただけるおもてなしについて話し合った。その結果，正門でのお迎え，案内，接待，飾り，司会などの係が発案され，英語の学習経験はさほど関係なく，自分のやりたいもの，得意なもの，やってみたいものなど個々の希望に基づいて係決めをしてグループが分かれた。

このように準備の内容や分担を決めるにあたっては，「希望（のぞみ）」の時間を使って話し合い，また，外国語活動の時間では，コミュニケーションツールとして使用する言語を調べたり，練習することによる慣れ親しみを目的に学習を進めていった。事前に出身国・性別・名前の情報をコーディネーターの留学生にお願いし送ってもらい，必要な係には情報を伝えることで，子どもたちの相手意識がより高まるようにしておいた。表４は，各グループの活動内容と使用した言語である。

表４　おもてなし活動内容と使用言語

係	活動内容と使用言語
実行委員	開閉会式の司会（複数の国の言葉でのあいさつ・お迎えの言葉・閉会の言葉など），ネームカードの作成 Thank you for coming to Fuzoku Mihara. Please enjoy with us today. How was our activity? Please Come back to Mihara again.　など

接待	This is Japanese Tea. Here you are. Do you like it? 日本茶の入れ方を学ぶ。
飾り	WELCOM TO MIHARA の看板作り 日本らしい飾り（千代紙を使った折り紙・絵など）
案内	控室から活動場所（教室・体育館）への案内 Let's go to the classroom. This is a ladies' washroom. This is a men's washroom. This is our classroom. Please wait.
お迎え係	正門での出迎え，見送り 正門⇔玄関の付き添い お迎えボード（国旗・アルファベットによる名前入り）の製作 Welcome to Mihara! Hello! Good bye. See you. How are you? Please come with me.
その他	【遊び】 ABC カルタを作成（Apple, Banana…etc.） 【クイズ】 学校に関する三択クイズを英語で作成 【プレゼント】 お土産作り（和紙を使った花作り） Thank you for coming. This is for you.

これらは，子どもたちが自分が担った責任を果たすために必要だと感じ，そしてグループごとに調べたり，教師あるいは家庭で尋ねたりして取り組んだ成果である。蒸し暑い梅雨の時期に冷たいお茶とタオルを出すために，事務の先生と何度も打合せをして練習したり，留学生が迷わないようにと校内の地図を英語で作成したり，案内の言葉を何度も復唱したりと，言語に不安のある子どももそうでない子どもも自分たちにできる精一杯のおもてなしを教師が予想していた以上に考え，取り組んでいた。「留学生にこれを伝えたい。おもてなししたい。」という思いがあるからこそ，伝える内容を考え，日本語を英語に直すための努力をし，それを覚えて練習するという活動に主体的に取り組んでいるのである。また，事務の先生や正門にいる警備の方との打ち合わせなど，お願いをしたり必要事項を伝えたりすることも日本語ではあるが，コミュニケーション能力の素地を養うものであることに変わりない。そして，本番では言いたかったことや思いが通じたことを喜び，また忘れてしまってどうしようもなくなった時に，伝えたいという同じ思いをもつ友だちがそっと助け船を出してくれることもあり，協同で取り組む学習効果が見られた。そして，とっさのジェスチャーや日本語，あるいは留学生の手をとって教室まで来るなど，ここでもまた共通言語によらないコミュニケーションがあることを体験を通して気づき，学んでいくことができた。

図２　おもてなし

４　研究の成果

コミュニケーション能力の素地を養うという点について，本単元実施前後で行ったアンケートから，「外国の人と交流する上で大切なこと」についての自由記述より検証する。

単元に入る前のアンケートでは，外国の人と交流する際に大切なこととして「英語が分かること」「英語が話せること」など「言葉」をあげる子どもが半数以上を占めていた。子どもたちの約６割が英語や英会話の経験年数が１年未満であり，また幼いころから英語や英会話を習っているという子どもも少数いるが言語能力は限られたものである。そのような子どもたちが交流を通して気づき学んだことは，「言葉」だけでなく「相手への思いやり」「他者理解」「伝えたいという気もち」「相手のことを知りたいという気もち」の重要性である。以下，子どもたちの記述を紹介する。

・ぼくが「笑顔」で聞いたら，留学生さんも「笑顔」で応えてくれたので嬉しかった。

・全然育った国や言葉が違っても，伝えられたり，分かり合えたりすることを学びました。一つ目はどんなに言葉が分からなくても，身ぶり手ぶりで伝え合えることです。二つ目は分かる言葉や聞いたことのある言葉を話すことです。全く何も言わなかったら相手も分からないから，勇気を出してひと言でも伝わるように伝えたら分かり合えると思います。
・ぼくは英語を習っているけれど，インドの話は大体しか分からなかった。まだまだ英語を勉強しないといけないことを学んだ。そして，言葉だけでなく世界の国や文化のことについてもっと知りたいと思った。
・その人のことや国のことを知っていれば，もっとたくさん話すことができると思う。

さらに，協同学習の効果を子どもたちの記述からふり返ってみる。

・留学生さんにインタビューする時，忘れていた言葉を，○○さんが横からそっと教えてくれて助かった。伝わってほっとした。
・○○さんと協力して留学生さんを迎える準備をすることができた。一人では絶対無理だったけれど，何度も一緒に練習したり打合せをしたりして，留学生さんが喜んでくれたのでうれしかった。

緊張感いっぱいで迎えた交流が，友だちの存在により成功体験へとつながり，子どもの外国の人との交流に対する意欲へとつながる結果となっている。

後日，子どもたちとともに，一連の交流活動を写真や映像，そして留学生からの手紙でふり返った。留学生の心のうちを聞き，自分と留学生の様子を客観的に見つめることで，自分たちの行った活動とそこに存在していた留学生に対する気持ちへの肯定感を高めることにもつながったようである。さらにその１ヶ月後，全く予定外ではあったものの，タイからの訪問者（約30名）が来校された際，子どもたちはおもてなし活動に手を挙げ，自分たちで計画を話し合ったり，実践に移すことができたりしたのも，学習の成果であったと考える。

５　まとめ

今回の研究では，新領域「希望（のぞみ）」の学習と関連を図りながら，必然性と協同学習という２つの視点を採り入れた外国語活動の授業づくりを行った。その結果，子どもたちは自ら課題に意欲的に取り組み，外国語活動の目標である３つの柱を踏まえながらコミュニケーション能力の素地を養うことができることが検証された。

一方で，音声への慣れ親しみという点で，特にグループごとのおもてなし活動においては，十分な練習時間がとれず，家庭学習となったり，担任やJTEから聞いた英文を片仮名に直して丸暗記していたりするため，本番以外の場面で活用できない，すなわち応用することが難しいことも課題として浮き彫りになっている。

また，日頃から友だち同士の間でも消極的な子どもについては，グループ編成の際に留意したり，活動でも声かけや手立てといった何らかの支援が必要となったりする。日本語・外国語に関わらず，社会で必要とされる豊かなコミュニケーション能力を育成するためにも，こういった子どもたちが安心して自分を出せる学級づくり，集団作りに日頃から取り組む必要があると考える。

＜引用文献＞

1)　文部科学省：「小学校学習指導要領解説　外国語活動編」，pp７－９，2008，東洋館出版社.
2)　江根川春雄：「協同学習を取り入れた英語授業のすすめ」，p. ６，2012，大修館書店.
3)　杉江修治：「協同学習入門」，p. １，2011，ナカニシヤ出版.